

(二) 山羊の発情

山羊、goat を英和辞書でひくと、「淫乱と好色の象徴、悪魔は山羊の足をしているとも言われる」とある。なんでまた？

11月のある朝、白いから「雪」と名づけられた山羊が、夜明けとともにけたたましく鳴き始めた。ふだんなら時々メエエとかクウウとか言うほかは、女房が忙しくて草場に連れて行ってもらえず、ほったらかされて腹が減った午後にはしか鳴かないのであるが。

ひょっとして、ともの好きな女房がかがんで山羊の尻を覗（のぞ）いてみると、尻尾（しっぽ）の下の逆三角形のピンク色の粘膜らしい部分の、ウンチがぽろぽろと出てくるところのすぐ下が、ふだんより赤みが強くなり、少し盛り上がっている。

ついに来たか。

発情期である。たぶんこの秋には種がつけられるよ、とは聞いていた。

が、これほどやかましいとは。

山羊は鳴き続ける。声がでかい。尋常なデカさではない。近所迷惑を思い、女房は胃が痛くなってきた。買った時の農家に電話をしてみると

「あ、きましたか。発情ですねえ。24時間続きます」

女房はショックで椅子から転げ落ちそうになった。

「え。24時間！」

「そうです。してこれからねえ、そうねえ、3月くらいまで、3週間おきに、何度もきますから」

女房はめまいがして卒倒するかと思った。買う時に念を入れて、何か気をつけることはないかと聞いたのに、どうしてその時言ってくれなかった！

「種つけるならねえ、わたしのところさ雄山羊いますから、ちょっとまだ幼いんだけど、発情さきてる雌が傍いっと、その気さなると思うから、連れてきてくださいよ。じゃわたしは今日は医者行かなきゃならないもんで、失礼しますよ」

ツーツーと切れた受話器を手に、口をポカンと開けたまま女房はしばらく動けな

かった。

山羊はただ事ではない声で鳴き続ける。このままでは山羊を連れて夜逃げでもせねばならない。

女房は必死で考えた。

人間なら避妊薬がある。いわゆるピル。毎日のめば、生理、つまり排卵がない。つまりたぶん、発情しない。いや、人間の場合は1年中発情しているようなものだから、ちょっと話が違うが、もし、山羊にもそういうホルモン剤があれば、発情を抑えられる筈である。あるいは、犬や猫のように、子宮と卵巣を取ってしまえば、避妊でき、そして発情も来なくなる。

どの医者がやってくれるか。

まずは、以前猫を連れて行ったこぎれいな動物病院に電話をかけてみた。山羊は診(み)ない、とすげなく言ったが、別の、豚を主に診るといふ獣医を紹介してくれた。茨城は農業県である。ローズポークというブランド豚があるくらいだ。電話には留守番のばあ様が出、昼に獣医が往診から帰ってくると言う。

誠実そうな獣医は、山羊の発情抑制の手段など「どうしたらいいんでしょうねえ、わたしにはわかりません。山羊の避妊手術はわたしはやったことがないからやりません」と言い、県の畜産センターに聞いてみろと勧めた。

県の獣医も怪訝(けげん)そうであった。山羊はフツー仔を産ませ乳を出させるために飼う。よって発情の来ない雌に発情させるためのホルモン剤はあっても、発情を抑えるようなホルモン剤は「ない」と断言する。

「わたしは近所迷惑で朝から胃が痛いんです。何かいい手はないでしょうか？」

「いったいお宅は何をしてる家ですか」

「何って、サラリーマンの家ですけど」

「農家じゃないんですか!？」

「農家じゃないんです!!! 空き地の草を食べて欲しくて飼い始めて、草はとてもよく食べてくれるんで助かってるんですけど、団地なもんでやかましいのは困るんです!」

女房の声はほとんど悲鳴である。

「ははあ、牛はねえ、発情が来てもそんなに鳴いたりしないんですけど、山羊は鳴くんです！」

獣医はなぜかとても嬉しそうだった。

女房はちっとも嬉しくない。

「どうしても鳴かれたら困るなら、種つけして妊娠させたらいいですよ。もう発情がこなくなりますから」

「仔山羊を産ませるんですか？」

「そうです。乳もとれますよ」

ハテ。

仔山羊を産ませるとなると、話がまるで違ってくる。もの好きな上に無鉄砲で、ろくに考えもしないうちに頭から飛びこむのが得意な女房ではあるが、さすがにひとりでは決めかねた。だいたい山羊を飼いたいと言い始めたのは、もの好きで動物好きだが、女房よりは常識人の亭主である。

が、現在アメリカ出張中。